再現された対話
——辻邦生氏との対談によせて

山内昌之

私は辻邦生氏とお会いしたことはない。まったく言葉を交わす機会もなかったということだ。しかし、さる文芸誌で氏と対談する企画が持ち上がり、日取りまで決まったことがある。場所は、辻氏の御希望で軽井沢の別荘でということになった。ところが、対談日の直前に出張先のサッポロに編集者から電話があり、氏の急逝を知らされたのである。これは、まことに運命のいたずらとしか思えなかった。サッポロから軽井沢に出かける予定で切符の手配を済ませ、学生時代から尊敬していた辻氏との対談を心待ちにしていた矢先の悲報である。

対談が幻に終わったことにつき、佐保子夫人からは邦生氏が私との語らいを楽しみにしていたと、まことに丁重なお便りを頂戴した。夫人もまもなく他界されたことは悲しみをさらに深いものにした。

実のところ、私は辻氏とまじかに接したことが一度だけある。或る出版社のパーティー会場の入口で見かけた仏文学者の菅野昭正氏に挨拶すると、すぐそばに辻氏ご夫妻がいるではないか。心ときめく思いがしたことはいうまでもない。私は当時、同じ大学にいた菅野氏とたまたま同時期に朝日新聞の書評委員を務めていた。ある日の夕刻、私が辻氏の小説を『廻廊にて』

から『安土往還記』など日本史三部作にいたるまで、ほぼ全作品を読んだと語ったことがある。すると氏は喜んで、「今度辻に会ったら新刊書を山内さんに送るように言っておきますから」と、私には嬉しい約束をしていただいた。

会場入口は混んでおり、菅野氏が私を辻氏に紹介する機会はついに訪れなかった。それからしばらくして、菅野氏の一件とは別に、辻氏との対談企画がもちこまれたわけである。対談のテーマはとくになく、二人が自由に歴史と文学のぐるりを語るという設定だったと記憶している。とはいえ、二十二歳も年長の文学者の寛恕に甘えてばかりもいられなかった。私としては、話のとっかかりとして、まず歴史や人間における運や運命について辻氏から文学論を引き出すことを考えた。私の専門なら、歴史における必然性と偶然性というテーマにもつながる。もとより、運と運命は同じものではない。しかし、人間の行く末を決めるという点で、この二つには驚くほど共通する面がある。

これなら、エドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』やトルストイ『戦争と平和』付録などを素材に、文学論と史論を交わせるのではと客気満々だったのは、私も若かったからだ。私は、辻氏が在仏中に関心をもたれた古典ギリシアや『背教者ユリアヌス』のローマを意識しながら、プルタルコスの『英雄伝』(対比列伝)を素材に議論を始めたいと考えていた。いまかりそめに、二人の対談を想像してみると、出だしは次のようになったのではないだろうか。

私は二人に共通する問題関心として、まさに人間の運や運命に関わるゴルディアスの結び目あたりから会話を始めたはずだ。それは、「アレクサンドロスとカエサル」の章で紹介された王位継承に関わる逸話を扱っている。主題は、古代アナトリア(現トルコ)中西部に住むプリュ

ギア人における王位をめぐる争いの解決策である。神託によれば、新王には最初に荷車に乗ってきた者が就くべきとされた。そうすれば争いは止むというのだ。神託に従って王になったのは、貧しいゴルディオスでありその息子ミダスである。

王位に就いた二人は、荷車を神に奉納した。ただし、荷車は複雑に絡み合ったミズキの樹皮の縄でぐるぐる巻にされていた。このゴルディオスの縄を解いた者こそ、真に世界を統べる王になると定められたのである。結び目には縄の端が見当たらず、しかも結んだ上に幾重にも巻かれて塊になっていたため、マケドニアからやってきたアレクサンドロスも、縄を解くのに困惑した。そこで彼は、剣でその塊を断ち切った。すると、切られたところから縄の端がいくつも現れ、わけなく複雑な縄の目は解けたのである。こうして「ゴルディオスの結び目を両断する」とは、「快刀乱麻を断つ」ひいては「不可解な問題を解く」を意味する逸話になったのは周知の通りである（プルタルコス『英雄伝』5巻、38―39ページ、城江良和訳）。

ゴルディアスの縄は、文学・神話学と民族学・歴史学にまたがる格好のテーマとして辻氏と私が話の口火を切るにふさわしい素材だったのではないか。今は靉靆（あいたい）とした記憶の彼方からさらに思い出すなら、私はギリシアからプリュギア（トルコ）を経て、アレクサンドロスが対決することになるダレイオスのイラン（古代ペルシア）の古典にある運や運命に関わる類似の話を辻氏に語ることで対談を拡げようと思ったようだ。会話自然の流れで辻氏の関心や疑問を私のフィールドのイスラム史や中東研究にも出していただくことを狙ったのかもしれない。そこで、サアディーの教養書『薔薇園（ゴレスターン）』にある話を手がかりにしたかったのである。それはプルタルコスの史話と似た王位継承問題であった。

古代アラビアの或る王は、もはや余命が旦夕に迫ったとき、決めかねていた次の国王の継承法を定めた。それは、王の死んだ翌朝、いちばん早く城門に入った人物に後継を託するというものだった。すると、最初に入市してきたのは、なんと、ぼろをまとい残飯をあさっていた乞食にほかならない。しかし遺詔は遺詔である。城の鍵と財宝はこの乞食に譲渡された。遺詔つまり君子の遺言に従って即位した乞食は、しばらくは何とか国を治めていた。

しかし、まもなく貴族や各地の王たちは蹶起し、鎮圧のために集結させた軍隊も人民の一部とともに乞食の王に反旗を翻す有様だった。この混乱のなかで孤立し悲嘆する新王のもとに、ともに貧困の時代を経験した旧友が訪ねて来た。この友は、新王が「非常な幸運に導かれ、繁栄と仕合せに助けられて」、栄位に達したことを祝いながらも、「苦あれば楽あり」と慰めるのも忘れなかった。そして詩を寄せる。

つぼみは、花開き、しぼむ
樹は、時には裸、時には衣をまとう。

新王は祝いどころでなく自分の苦境を察してくれとぼやく。しかし、それは運に恵まれた者の幸せな心配というものだ。なにしろ一片のパンにも困っていた乞食がいまや世界の政治を心配するのだから、と。こうしてサアディーが披露する詩は、運が富とからむ場合に必ずしも幸運ばかりでなく、時には悲運も待ち構えていると警告したのである。

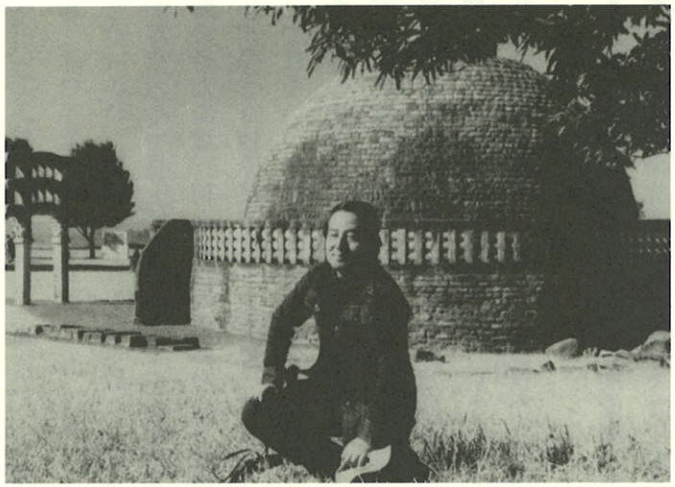
富あらざれば、我らは悩む
富あらば愛着、われらの足を縛すべし
かかる俗事ほど惑わしき禍はなし

有るも無きも、共に心の悲しみなり。
たとえ汝富を欲するとも
より以上に求むるなかれ、かかる富こそ楽しけれ。
よしんば、富める人、汝のすそに金を散ぜんとも

そして、聖人の助言として、「貧しき者の耐乏は、富める者の施しよりもよしと」語るのである（沢英三訳『ゴレスターン』120―121。また蒲生礼一訳『薔薇園』146―147も参照）

これら王位に関わる逸話が気になったのは、フランク王国のサリカ法典の影響を受けて、フランス諸王朝がいずれも女系を含む女性の王位継承権を否定したため、フランスでは女王が誕生しなかった意外な史実に関心があったからだ。サリカ法典などを、フランス通の作家の目からどうとらえるか、辻氏の滅多に聞けない歴史観を引き出したい魂胆があったからだろう。これはすぐれて現代日本の皇位継承のテーマにもつながるからだ。

辻氏との果たせなかった対談の想定した筋を忘却の彼方から幽かにせよ再現できたのは、はるか年長の芸術家を、私が若き学徒である前に辻文学の敬虔な愛読者としても限りなく尊敬していたからだ。辻氏の『背教者ユリアヌス』や『天草の雅歌』を幾度も読み返した時の震えるような感動の波こそ、私が辻氏の物故した年齢を過ぎてから『将軍の世紀』（上下、文藝春秋）を書く原動力の一部になったことを率直に告白しなくてはならない。



インド・サンチの仏教遺跡を見学　1974年